

この種の僕の論文との御熟読を願いたい。そしてますます御評判のほどを、重ねてひとえにおん願ひ奉る。

## 生の創造

「いっさいの生産方法を社会の所有に帰せしむるとともに、商品の生産は排除せられ、それとともにまた、生産者に対する生産物の支配が排除せられる。社会的生産を支配する混乱に繼いで、自覚的組織が起る。個人的生存競争が止む。

「かくして初めて人は、確実なる意味において、まったく動物界を離れ、動物的存在の状態から人間的存在の状態に移る。従来人間を支配していた生の条件の総体が、人間自身の指揮と討究との下に移り、初めて人間は、自己の団体生活の主人となり、自然の眞実なる主人となる。

「従来は人間の外にあって、外的法則として彼等を支配していた、人間自身の社会的活動の法則が、人間自身によって、原因の十分なる知識において、適用せられまた統御せられる。従来は自然によりあるいは歴史によって人間に課せられていた団体生活そのものも人間自身の自

由なる製作となる。従来歴史を支配していた、外的の、客観的の諸種の力が、人間の監督の下に移る。

「この時以来、初めて人間は、十分なる自覚をもって自己の歴史を作る。この時以来初めて、人間の企図する社会的諸原因が、その大部分において、しかもますます増加する比例をもって、求められたる結果に到達する。

「これ必然の世界より自由の世界への人類の飛躍である。世界のこの解放的活動を成就する、これ近世平民階級の歴史的任務である。」

僕は今、僕の「生の創造」論をやる一便宜として、社会主義者の間に知れわたっている、エングルス著『科学的社会主義と空想的社会主義』の中のこの一節を借りて来た。この一節はまた、ローマ大学における社会主義の教授、故アントニオ・ラブリオーラによって、その著『物質的史観説』の結論の中に、社会主義の物質論が含む絶大なる理想論を証せんがために、ことに引用せられたものである。

必然から自由への飛躍的生活！ 外的強迫から内的発意への創造的生活！ これ実に社会主義の理想とする最後の目標である。そしてまた最近思想界におけるもっとも鮮かなる色彩の旗印である。

社会主義はこの理想に達せんがために、まず給人の自由なる発達の予件たる、各個人の自由なる発達を可能ならしむる周囲に到らんと欲して、いっさいの生産方法の公有を主張した。社会主義が計画するこの周囲、すなわち社会主義的社会に対しては、なお幾多の異論もあり得ようが、ともかくもこの着眼点だけは善かった。

われわれは個人のない社会を想像し得ないと同時に、蔽密なる意味において、社会のない個人をも想像し得ない。したがって社会的周囲を背景としない個人論のはなはだ無価値なることを思う。しかるに社会主義はこの社会的周囲を過重するの結果、その社会論から個人的要素を除き去ってしまった。その理想的周囲に到るまでの各個人の態度について、真に個人としての態度について、ついにほとんど語るところがなかった。

社会主義は信ずる。平民の解放はわれわれの意志の外にある諸種の事情、ことに工業の発達より生ずる事情に係わる。労働階級の精神的進歩は、ただこの解放を容易にするものに過ぎない。新しき経済が新しき道徳を創るのであると。

社会主義はこのいわゆる物質的史観説に立脚して、社会進化の要素として経済的行程、工業技術的行程を過大視するの結果、かの必然から自由への飛躍を、外的強迫から内的発意への創造を、単に到着点としてのみ強調して、等しくまたこれを出発点としなければならぬことを忘れてしまった。

経済的行程が道徳を創るということをあまりに大まかに主張した社会主義の哲学の前には、あらかじめ各個人の道徳的性質を説くがときは、もとより無駄事であったのであろう。しかし社会主義が躓いたのは結局この石であった。僕はまず、これを理論の上においてよりは、むしろ事実の上において見たい。

社会主義はその数十年間の苦戦苦闘の後に、その理論においても運動においても、ますますその最初の目的と遠ざかり去った。これは欧米各国の社会主義史に観て、恐らくは何等の疑問をも許さない事実である。かつてはその味方たりし真に自覚せる労働者の群が、今やかえって、これを敵視し蛇蝎視するまでに至った。そしてその主たる所因の一として観るべきものは、要するに社会主義哲学のこの誤謬である。僕はサンジカリズムの近來の勃興を見て、ことにこれを痛感する。

サンジカリズムは言う。社会主義は定命的生成 *le devenir fatal* ではない。任意的組成 *formation volontaire* である。労働者が優越なる精神的教化の程度に達せざる限り、社会主義の経済的変革は実現せられない。新しき道徳は現在の社会の中に創られねばならぬのだ。そしてこの新道徳の力が、新しき社会状態を可能ならしめるのだと。

さらに言う。資本家制度の中に社会主義が成熟するということには、工業技術的發達を俟た

なければならぬのはもとよりである。社会主義は、十分に發達したかつ不斷に進歩して行く生産力の上にもとづく、一経済組織である。

しかしこの技術的發達は、単にその一面に過ぎない。そして、より少なからざる重大の他の一面は、旧組織の中における新しき精神的力の發達である。すなわち労働者階級の政治的、司法的、および精神的諸才能の發達である。

伝習的国家なるものを一掃し去って、労働者自身の組織をもってこれに代らしめんとする、かくのごとき大變革は、労働者の高き精神的教修と、社会の経済的職能を指導するの才能とを予想しなければならぬ。されば労働者自身にこの準備ができた時、すなわち自ら社会を經營し得ると感じた時、初めて社会革命が来るのである。

されば労働者の精神的教育ということがまず肝心なのである。労働者に自ら意志することを教え、活動によって彼等を訓練し、そして彼等自身の才能を彼等に啓示しなければならぬ。これが社会主義教育の全秘訣である。

かくしていわゆる新社会主義は、「労働者の解放は労働者自らの仕事であらねばならぬ」という『共産党宣言』の結語を、まったく文字通りの意味に復活せしめようとした。

そしてこの「労働者自らの仕事」というところに、サンジカリズムは、自由と創造とを見出したのである。過去とは絶縁した、すなわち紳士閥社会の産んだ民主的思想や制度とは独立し

た、またそれらの模倣でもない、まったく異なった思想と制度とを、まず彼等自身の中に、彼等自身の団体の中に、彼等自身の努力によって、発育生長せしめようとした。

すなわちサンジカリズムは、かのエンゲルスの「いっさいの生産方法を社会の所有に帰せしむとともに」以下の諸予想を、まず自らの中に多少実現せしめて後、少なくとも精神的に実現せしめて後、初めてその社会的可能を信じ、社会革命の可能を信ずる。サンジカリズムの強大なる力は、実にその源泉をここに掘み来たるのである。

運動には方向はある。しかしいわゆる最後の目的はない。一運動の理想は、そのいわゆる最後の目的の中に自らを見出すものではない。理想は常にその運動と伴い、その運動とともに進んで行く。理想が運動の前方にあるのではない。運動そのものの中にあるのだ。運動そのものの中にその型を刻んで行くのだ。

自由と創造とはこれを将来にのみわれわれが憧憬すべき理想ではない。われわれはまずこれを現実の中に捕捉しなければならぬ。われわれ自身の中に獲らなければならぬ。

自由と創造とをわれわれ自身の中に獲るとはすなわち自己の自己であることを知り、かつこの自己の中に、自己によって生きて行くことを知ることである。

社会主義者はよく、自覚が社会生活を創るのではない、社会生活が自覚を創るのであると言

う。そして常にこれを誇張する。われわれもまた、この事実の真実でありかつはなはだ重大であることを知っている。けれどもそれと同時にまた、さらにこの自覚が新しき社会生活を創るの事実を忘れることはできない。すなわちわれわれは、種々なる社会的傾向を判断し、その中からわれわれの内的憧憬と近きもの、われわれの個人的生活意志と近きものを選ぶの事実を知っている。時としてはそれらの諸傾向を否認し、超越して行くの事実をも知っている。すなわちわれわれの権力意志が奮起するの事実を見るのである。かくしてわれわれは、自我の、個人的発意の、自由と創造とを思い、かつここに個人および社会の進化の基礎を置かねばならぬことを感ずる。

自我は自由に思索し自由に行動する、ニーチェの言えるがごとく、彼岸に向う渴望の矢である。われわれはまず、この自我を、いっさいの将来を含むこの神秘なる芽を、捕捉し発育せしめねばならぬ。

自由と創造とは、われわれの外に、また将来にあるのではない。われわれの中に、現に、あるのだ。

自我は活動と反省とによって、これを捕捉し発育せしめることができる。そしてわれわれはまず、この捕捉し得たる自我をして、その固有の性質たる自由と創造とを、自由なる思索と行

動とを、そのなし得るいっさいの方面に働かさねばならぬ。

かくしてわれわれは、初めてそこに、自我と周囲との峻烈なる闘争を見るのである。新人の恐るべき努力を見るのである。

この努力と闘争とのないところに、自我の眞の発展は見出され得ない。自我の強大はこの努力と闘争との中のみ求められるべきものである。自由と創造との理想の進行には、人格の鍛練には、必ずこの闘争の野を経なければならぬ。

しかも今日のごとき、ほとんどあらゆる社会的制度が、自我の圧迫と破壊とに勉むる場合において、自我の向うところは、これらの社会的制度に対する叛逆に外はない。

われわれはこの努力と闘争のもっとも偉大なるものを、今日、アナルシストとサンジカリストとの運動に見出した。

彼等は、その生活意志と権力意志のもっとも強大なる、少数者である。もっとも多く過去を解脱した新人である。個人的にまた社会的に、もっとも実り多きまた多かるべき、創造者である。

彼等はまず、一方に思想および感情の類似あるいは利害関係の縁をもつて、強固なる団結を組織するとともに、他方にその周囲との断乎たる闘争に従った。彼等の合言葉はこの団結と叛逆とである。

彼等少数者は多数者の無為と懶惰を知っている。多数者が自らその自我を捕捉する能わざるを知っている。自動力の欠如を知っている。されば彼等の事をなすや決して多数者のいわゆる一般意志に謀るの愚をしない。彼等はまず自ら起った。そしてその大胆なる思想と行為とをもつて、多数者に発意と実例と先導とを与えた。多数者は、自らを運転せしめて、その強力な潜勢力を働かしめる、何等かの衝動力を必要とするものである。

彼等少数者は、何事をも自ら処決し、自ら管理せんとするものではない。多数者を、群集を、でき得るだけ静穩に、無為に、柔順に、処らしめんとするものではない。かえて、自らとともに群集を働かすことよつてのみ、かつ群集を直接に闘争に与からしむることよつてのみ、その活動の有効を信ずるものである。またこれよつて、多数者に、群集に、少なくともその中のあるものに、漸次に自我を捕捉するの道を教え得ると信ずるものである。

われわれは今ここに、彼等の運動の詳細を論ずるの自由をもたない。またそれを論ずることがこの文の目的でもない。われわれはただ、生の創造という近時の流行語を、多少社会学的意味に解釈すれば足りるのだ。

要するに彼等少数者は、かくして現存社会の基礎を漸次に崩壊して、旧社会の組織の中に、新社会の要素を發展せしめんとするのだ。そして、この行程の十分に進んだ時、最後の大闘争によつて、その掘りくずしたる建物を一掃して、彼等自身の中から創り出した新社会を建設せ

んとするのだ。

この新社会は未だその形式に関する詳細なる案を与えられていない。また彼等はその必要をも感じていない。しかし将来の線は、その大体において、現在の発達によって指示せられている。彼等の運動は明らかに「経済的連合制度」(le fédéralisme économique)に向って、その道に敷石しつつあるのだ。

## 知識の手淫

### 『近代思想』廃刊の辞

僕はもう、この『近代思想』のような intellectual masturbation (こんな英語はあるかないか知らんが、訳すれば知識の手淫とでも言おう) にあきあきしてしまった。われわれに情欲の、しかもきわめて強烈な情欲のある以上、それは何等かの方法をもって常にもらされなければならぬ。Masturbation も時によっては必須事である。けれども僕等は、僕等に取ってこの不自然事に、つくづく厭気がさして来た。僕等は僕等の自然事に帰らなければならぬ。

この意味から、僕等はもはや、今のままの『近代思想』の発刊を続けて行くことができなくなった。形式も内容もまるで一変させなければ、もう承知ができなくなった。Bourgeois の青年を相手にして、訳の分らぬ抽象論をするかわりに、僕等の真の友人たる労働者を相手にして、端的な具体論に進みたい。

なつかしき、しかしけがれたるこの『近代思想』は第二巻をもってその最後としたい。そし

て来たる十月から違った名の、違った性質の、新しき雑誌として再生させたい。

## 正気の狂人

『へちまの花』第三号に、荒畑寒村近著『シヨウ警句集』の批評が載っている。わずか十行足らずのものではあるが、その最後の一句が、ひどく僕の目についた。「寒村君の訳筆はすでに世に定評がある」までは、いかにもみだし通りの「お提灯」である。しかしその次の「ついでに一つここに警句を抜いておく、人間は最高の山頂までも攀登れるが、しかし、そこに永くは住めない」に至っては、見遁しのならぬ書振りである。

署名はしてないが、勿論これは堺利彦君の筆だ。そこで僕は、堺君のこの態度に対して一言すると同時に、この機会を利用して、僕等自身の主張、すなわち僕のいわゆる正気の狂人論をさらに徹底させたい。

言うまでもなく、あの最後の一句は、荒畑寒村に対する堺利彦君の皮肉である。最高の山頂

まで攀登って行かなければならぬことを常に主張し、かつ往々自らそこに到達しあるいは到達せんとして、すぐさま転げ落ちてしまう荒畑寒村が、その自著の中に、自らの生活や主張を嘲笑するような態度の、かくのごとき警句をさしいれた事実上の皮肉をさらに皮肉ったものである。

僕は今、あの皮肉好きの堺君が、ふとこの警句を見出して、それをこの皮肉の材料に使おうと思った時の、いかにもうれしそうな顔付を、目前に見ることが出来る。そしてその瞬間の堺君の心理をはなはだ賤しむ。

荒畑寒村のあの主張や生活は、同時にまた、僕自身の主張でありかつ生活である。のみならずさらに僕は、そして寒村もたぶんそうだろうと思うが、すべての人がそしてその順序としてまずある少数者が最高の山頂まで攀登らねばならぬのを、勧告しかつ強制したいのだ。したがって僕は、堺君のあの皮肉が寒村一人にさし向けられたとしても、さらに僕が堺君に対して差出口をしなければならぬ僕自身の義務を感じるのだ。

堺君のショウ好きは、思うに、単に彼の叛逆的方面のみでなく、またこう言ったごく低級の皮肉の方面にも、大ぶ堺君と似かよったところがあるからである。僕は今、この低級の皮肉という文字を、無理解から生じた皮肉の意味に使う。ショウは紳士閥社会に対するその観察と批評とにおいて、実に精緻と辛辣とを極めている。けれどもショウは、多くの社会主義者と等し

く、社会主義以外のもしくはそれにはなはだ接近した新思想に対して、往々はなはだしき無理解を示し、またその無理解から生ずるはなはだ賤劣な皮肉を娛しむ癖がある。彼の小論文「無政府主義の不可能」のごときは、彼自身が無政府主義的思想の断片を常に口にし、また筆にしながらも、なおかつ無政府主義という一歴史的理論に対するその定心と無理解との、いかにはなはだしきかを明示する好適例である。また彼は「イブセン説の神髄」において、あれほど明瞭なイブセンの無政府主義に、すなわち自覚せる個人の自由合意をもって組織する新社会の理想に、ケチをつけようとして、ためにこの書の発行者たるタッカーによって訂正の脚註を附せられている。

僕は、ショウのあの警句がどんな本のどんな場所にあるのか、知らない。したがって何を指し、何を意味するかも知らない。しかしそれは今問題ではない。要はただ、堺君が自分の主張と多少違った他人の主張に対して、しかも常に堺君に親近しまた堺君を尊敬しているその友人あるいは後輩の主張に対して、あえてその主張の内容に深く立入ることをせず、ほんの上すべての皮相的観察を下して、わずかに冷笑と皮肉とをもって得々としているその態度にあるのだ。

それは堺君の寒村に対するこんどの態度ばかりではない。僕自身もまた、最近においてしばしば堺君のこの態度に会っている。堺君はその「胡麻塩頭」において、数回僕の主張を批評し

た。曰く、あまりに英雄的である。曰く、あまりに神秘的である。そしてこれ以上には、それに附加せられた多少の皮肉の外に、ほとんど何事も言っていない。英雄的もしくは神秘的の語は、堺君に取ってはよほどの嘲笑の語である。しかるに堺君は、ただこれらの嘲笑の語を放っただけで、ほとんど何等の解剖をも僕の主張の上に加えていない。従来いささかなりとも僕の主張の上に異論を挿しはさむものらに対して、ただちにそれに食ってかかって行った僕が、特に堺君の嘲笑に対してのみほとんど沈黙を守っていたのは、僕の親近しかつ尊敬する友人または先輩の態度として、あまりに不親切なかつあまりに陋劣な態度だと、半ば憤り、かつ半ば賤しんでいたからである。しかし僕は、堺君のこの態度が思想上ようやく堺君を離れかけている他の友人または後輩にも向けられて来るのを見て、したがって先輩としての堺君に対する尊敬がそれらの人々の間に漸次薄らいで行く事実を見て、あえて堺君にこのことを一言する。

もとより僕等は、皮肉や嘲笑を怖れやしない。真に僕等を理解した皮肉や嘲笑は、舷を叩いて、僕等もまたそれに応じて、ともに僕等自身を皮肉りかつ嘲笑したい。また初めから僕等を理解することのできないものと僕等が認めている奴輩の低級な皮肉や嘲笑に対しては、ほとんど何等の痛痒をも感じない。けれども堺君は、僕等が十年あまり親近し、かつ尊敬し来たった先輩である。今僕等が堺君に要求するところは、まず僕等に対する真の理解である。またこの理解から生じた教訓もしくは嘲笑である。そして堺君もまたその友人または後輩たる僕等に対

して、これと同様の希望を懐くべきである。

去年の三月、近代思想社の晩餐会で、島村抱月、相馬御風の二氏を招いた時、芸術と実行というような話で、大ぶ議論を闘わしたことがあった。その後抱月氏はその晩の感想を、例の講義的調子で、『文章世界』に発表した。僕もまた、その後発表した「生の拡充」の中に、その晩ちょっと口走った実行の芸術という言葉の意味を明らかにした。

「僕は僕自身の生活において、この叛逆の中に、無限の美を享樂しつつある。そして僕のいわゆる実行の芸術なる意義もまた要するにここにある。実行とは生の直接の行動である。そして頭脳の科学的洗練を受けた近代人の実行は、いわゆる『本気の沙汰でない』実行ではない。前後の思慮のない実行ではない。あながちに手ばかりに任じた実行ではない。」

この「本気の沙汰でない」という句に特にカッコを入れたのは、その晩の議論の間に、僕の実行の芸術という語に多少反対らしかった堺君の言葉であったからだ。そしてその次の「あながちに」云々の句は、抱月氏が実行をただの腕力とばかり解していたようなのに当たったのであった。

「多年の観察と思索とから、生のもっとも有効なる活動であると信じた実行である。実行の前後は勿論、その最中といえども、なお当面の事件の背景が十分に頭に映じている実行であ

る。実行に伴う観照がある。観照に伴う恍惚がある。恍惚に伴う熱情がある。そしてこの熱情はさらに新しき実行を呼ぶ。そこにはもう単一な主観も、単一な客観もない。主観と客観とが合致する。これがレヴォリューションナリイとしての僕の法悦の境である。芸術の境である。」

僕は、僕の実行がいつでもこの種の実行であると言ふことはできない。また僕のこの種の実行が、いつでもこの文に現れたとき偉い実行だとも、言うことはできない。けれども僕には、この種のあるいはそれに近い実行の経験が、すでに幾度か味われた。

「かつこの境にある間、かの征服の事実に対する僕の意識は、全心的にもっとも明瞭なる時である。僕の自我は、僕の生は、もっとも確実に樹立した時である。そしてこの境を経験するたびに、僕の意識と僕の自我とは、ますます明瞭にますます確実になっていく。生の歡喜があふれて行く。」

かの征服の事実に対することばかりではない。僕の生の直接の行動たる実行には、意識的実行の時は勿論、無意識的実行の時にも、その最中かその直後かあるいは程経ての追懐において、僕はこの種の経験を、すでに幾度か味わった。

この経験は僕の正気の狂人論の一基礎である。僕はこの生の法悦を味わうがために、もっとも確実に樹立した自我の充実を得んがために、すなわち生の最高の山頂に攀登らんがために、正気の狂人論を主張したいのだ。そこに永く住めないのは、今の僕に取っての問題ではない。

幾度転げ落ちてもいい。要はただ、幾度でもそこへ登って行きたいのだ。そこへ登って行く努力だけでもしたいのだ。

この努力は、この行為は、しかも自己の生の拡充のためにいっさいの權威と障礙とに叛逆し、突進して行くもののこの努力とこの行為とは、習俗者から観れば、また習俗からぬけ切らぬものから観れば、多くは狂人の努力である、狂人の行為である。本気の沙汰でない行為である。けれども僕は、この狂人の行為を、本気の沙汰で、正気でやり遂げたいのだ。

いつかの僕の短文「野獸」(編者註・大杉榮全集第五卷所収)は、このいわゆる狂気の沙汰を、まだまだ思い切って実行することができない僕自身に対するいましめであったのだ。

僕は大きく自分の古い文を引用した。そして自分でそれに注釈を加えた。しかしこれは、先きにも言ったごとく、あの文の中にある僕自身の経験が、僕のこの正気の狂人論の一基礎であり、かつこの基礎を土台としなければ、僕がこの論をやる順序として欠けるところあるからである。そして僕は、この論の読者諸君に対して、さらに僕の主張を明らかにするために、先きに言った僕の諸論文を参照せられんことを願う。

ベルグソンはその著『意識の直接与件』の結論の中に、次の意味のことを言っている。

「二つの違った我がある。その一は他の外的投影、空間的表現、また、いわば社会的表現の

ようなものだ。われわれは深い反省によってこの第一の我に到達する。しかしわれわれがこのわれわれ自身を捕える瞬間は稀だ。そしてこの故にわれわれはめったに自由でないのだ。われわれは大部分の時間をわれわれ自身とは外的に生活する。われわれはわれわれの我の色あせた幽霊のみしか認めない。われわれはわれわれのためによりもむしろ外的世界のために生活している。われわれはわれわれ自身の思っているよりも余計に語る。われわれはわれわれ自身の行動するよりも余計に行動させられる。自由に行動するとは、自己を所有することである、純粹持続の中にわれわれ自身を置くことである。』

なおこの心理作用を真に理解するためには、等しくベルグソンによれば、「われわれがある重大な決心をなすべく選んだわれわれの生涯の瞬間、その類において唯一なる瞬間、またその歴史の過ぎ去った時機がその国民のために再来しないと同じく再び現れることのない瞬間を追懐」しなければならぬ。

ただこれだけの一節を書き抜いただけでは、あまりに漠然過ぎるかも知れぬ。しかし僕の議論の筋道としては、ただベルグソンがこう言っていたということを、ぼんやりでもいいから頭にいれて貰えばいいのだ。そしてなお、一時サンジカリズムの父とまで呼ばれたジュール・ソレルの著『暴力論』によれば、この自由は、われわれがわれわれ自身を閉じこめている歴史の框を破って、われわれ自身の中に、一新人を創り出そうとする努力の中に、ことにわれわれの

享け得べきものである。

僕はこの第一自我が捕えたいのだ。その類において唯一なるこの瞬間を捕えたいのだ。この自由を捕えたいのだ。この生の最高の山頂に攀登りたいのだ。そして僕は、この瞬間を僕のいわゆる正気の狂人的行為の中に、この崇高なる実行の芸術の中に、すでにしばしば見出し、また常に見出され得るものと信ずるのだ。幾度転げ落ちてもいい。ただ幾度でもこの山頂へ登って行きたいのだ。そこへ登って行く努力がしたいのだ。自分ばかりではない。他人にもまた、この努力と行為とを、勧告したいのだ、強制したいのだ。これのできない奴輩は、またこれをなそうとも思わぬ奴輩は、僕のいわゆる衆愚だ。歴史の創造に与からない怠惰者だ。

僕はさらにこの正気の狂人論を、堺君や僕等が等しく社会的仕事としている労働運動の上に考えて見たい。

ここに一ストライキが起るとする。僕はこのストライキをもって、ベルグソンのいわゆる「われわれがある重大な決心をなすべく選んだわれわれの生涯の一瞬間、その類において唯一なる瞬間」としたいのだ。平凡なストライキではない。安閑としてただ腕組ばかりしているストライキではない。本当に労働者が重大な決心を要するストライキだ。

すなわち、巨額の維持金をかかえて、永い間平穩無事にその腕組を続けて、これによって一

般社会の同情を得て、そして最後に政府者側の干渉をして労働者の利益に終らしめんとするよ  
うなストライキではない。維持金も何もなしに、短い時間の間に、労働者のエナジーをエ  
キستنシフでなくインテンシフに集中した、本当に労働者が重大な決心を要する、正気の狂  
人的ストライキだ。労働者のエナジーと自信と個人的勇氣と発意心とを、その最高潮に到ら  
しめるストライキだ。

もしすべての労働者が、かくのごとき極力的戦闘をすることを拒み、またかくのごとき生の  
最高の山頂に攀登ることを拒むならば、労働者は永遠の奴隷である。

生の最高潮に上りつめた瞬間のわれわれは価値の創造者である、一種の超人である。僕はこ  
の超人の気持が味わいたいのだ。そして自らこの瞬間的超人を経験する度数の重なるに従っ  
て、一步一步、この種の真の超人となる資格が得たいのだ。

## 賭博本能論

僕等の『平民新聞』創刊の計画について、ある深切な二、三の友人は、僕等に忠告して言  
う。かの大逆事件以来、歴代の政府の方針は、いっさいの無政府主義のおよび社会主義的言論  
を、絶対に禁止するということにあるらしい。大隈内閣が言論の尊重を宣言したといっても、勿  
論それは、君等には適用される筈がない。現に『新仏教』五月号は、堺君の「平民読本」のた  
めに発売禁止の厄に遭い、また日本労働党の発行した「労働者諸君に与う」と題するチラシも  
差押えを食っている。君等の新雑誌は、あるいは創刊勿々この手を食って、おまけに君等二人  
も、すぐさまぶちこまれるようなことになりはしまいか。いや、あるいは政府では、手ぐすね  
引いて、十月の来るのを待ち構えているのかも知れぬ。そうなると、まるで君等は、政府のわ  
なの中へ、わざわざ飛びこんで行くような愚に陥いる。それよりはやはり、もうしばらく忍ん  
で、今のままの『近代思想』に拠って、例の哲学とか科学とか文学とかいう安全な保護色の下